

大学生の「よい子」傾向と心理社会的発達段階の関連

菊池 由莉・岡本 祐子

The relationship between “good children” and psychosocial development in university students

Yuri Kikuchi and Yuko Okamoto

本研究は、Erikson(1950 仁科訳 1977/1980)の視点から、「よい子」の心理社会的発達を検討するものである。本研究では「よい子」を、宗像(1997)に依拠し、「周りの人との関係の中で、自分の肩を持ってくれる人に気に入られようとして、自分の感情を抑えてでもその人の期待に応えようとする『自己抑制型行動特性(通称イイコ行動特性)』を持つ青年」と定義した。仮説として、「よい子」傾向が高くなるほど、①「信頼性」「自律性」「自主性」「アイデンティティ」の達成度は低くなる、②「勤勉性」の達成がよい、の2点を挙げた。質問紙調査を実施し、大学生214名から有効回答を得た。分析の結果、本研究の「よい子」は、「自己の抑制・喪失」、「他者の意向に沿おうとする」という2つの特徴を有していた。さらに「よい子」傾向と心理社会的発達段階の関連を検討したところ、「よい子」傾向が高まるほど、「信頼性」、「自律性」、「自主性」、「勤勉性」、「アイデンティティ」、「親密性」、「統合性」の達成度が低くなることが示された。

キーワード: 「よい子」、心理社会的発達、アイデンティティ

問題と目的

1. 「よい子」の特徴と定義

青年期に様々な心の問題を呈する子どもたちには、いわゆる「よい子」であった子どもたちが多いとの指摘がある(河合, 1996)。一般に「よい子」とは、素直に大人の言うことを聞き、大人を決して困らせない、明るく素直な子。また成績は優秀で、礼儀正しい子といえる。一見すると親や教師にとって理想的であり、自身も適応的に見える「よい子」がどうしても心の問題を呈してしまうのであろうか。最も大きな要因に、「よい子」たちのこの姿は本来の姿ではなく、親や教師の期待する理想の子ども像を演じているに過ぎないということが挙げられる。すなわち「よい子」とは大人たちにとって「都合のよい子(河合, 1996)」なのだといえる。

「よい子」とは学術用語ではなく、様々な定義や位置づけがなされている。その中でも「よい子」に関する系統的な研究を行っている宗像(1997)は、「よい子」の特性を、周りの人との関係の中で、

自分の肩を持ってくれる人に気に入られようとして、自分の感情を抑えてでもその人の期待に応えようとする「自己抑制型行動特性（通称イイコ行動特性）」と捉えた。このような行動特性をもつ「よい子」は、周りの人との関係の中で、自分にとって重要な他者に気に入られるために期待に応えようということから、さまざまな生活上の要請や刺激にさらされやすく、しかも、自分の感情を抑えてでも応えようとするため、不快感、不安、不満などを持ちやすい。さらにそうした不満や不安などを感じやすい自分自身に対して嫌悪感や無力感や“自分らしさ”の喪失感を感じて、余計にストレス状態を増強する。その結果、神経症状、抑うつ症状、心身症状を最も感じやすいと言える。しかもそれらの不満、不安、不快などを代償するためにタバコや飲酒、気晴らし食いなど、不健康な手段にも依存するようになるため、さまざまな慢性疾患を形成する習慣をつくりやすい。

また、「よい子」と類似した概念に「過剰適応」が挙げられる。そもそも適応には内的適応と外的適応がある。前者は心理的適応とも呼ばれ、個人的幸福感・心理的満足がそなわっており、心理的に安定した状態をいう。一方、後者は社会的・文化的適応とも呼ばれ、個人が生きている社会的・文化的環境に対する適応を意味し、社会的効率性をそなえた状態である（北村，1965）。一般に適応がよいとされるときには、内的適応・外的適応がともにいいことを意味するものであり、一方の適応がよくても他方の適応がよくない場合は、異常適応あるいは不適応と呼ばれる。この時、外的適応は効率的に行われていても、内的適応がよくない場合、つまり、外的適応が過剰なために内的適応が困難に陥っている状態を過剰適応と言うことができる（桑山，2003）。この過剰適応があまりに過ぎる時、上記のような「よい子」の問題が生じると考えられる。

以上から、本研究では、宗像（1997）の自己抑制型行動特性の定義に依拠して「よい子」を捉える。さらに「よい子」を適応のあり方という視点で捉えた場合を過剰適応と述べ、「よい子」と過剰適応を同義に扱うこととする。

2. 「よい子」に関する調査研究

宗像（1997）は、自己抑制型特性と各諸特性との相関について指摘している。その結果、悪い自己価値観、他者への依存心といった心理社会的諸特性、タイプA行動特性、逃避的なストレス対処方略、低い自己実現型行動特性といった行動特性、家庭環境・職場環境・夫婦関係の不良や情緒的支援者が乏しいといった対人関係、低い他者価値観や幸福感、抑うつ・神経症状、心身症が多いといった情緒及び症状、日常苛立ちごと、過去の無力体験が多いといったストレス源との間に相関があることを指摘した。さらに、「よい子」特性とGHQ尺度における神経症圏の間に、正の相関があることを指摘した。

以上から、「よい子」が、内外の適応に問題を抱えていることが指摘できる。では「よい子」はどのように形成されるのであろうか。「よい子」というのは、親から見捨てられたり、親の愛情を感じられなかったりするような心傷性の出来事によって、認められたい、愛されたいという慈愛願望の充足が阻害された結果で、自分を信用できない。そのため、親からの愛情を得るために自分の欲求を犠牲にして、親の意見に従うことで安心を得た。その結果、自己決定が苦手で、親に決定を委ねることを選択するという依存的な心が形成されていくという生育史をたどっている（宗像，1998）。また、子どもの適性や心理状態にまったく対応をしない親の依存心も、子どもに対する過剰な期待

を生じさせ、子どもを「よい子」にしてしまうという（宗像，1997）。さらに、「よい子」自身も親から嫌われたくないという依存心から、親の依存的な欲求を受け入れることが考えられる。このように「よい子」の親子関係は、相互に絡み合った関係であると考えられる。

上記のような生育史をたどる「よい子」の自我発達は、未熟であることが予想される。さらに言えば、「自分らしさ」の喪失を抱える「よい子」はアイデンティティ拡散の危機に陥っていることが推察できる。以上から、アイデンティティの視点に基づく「よい子」の研究を行うことは、非常に意義深いといえる。しかしながら、そのような視点にもとづく実証的研究は見当たらない。

3. 目的

本研究では「よい子」の定義を、宗像（1997）に依拠し「周りの人との関係の中で、自分の肩を持ってくれる人に気に入られようとして、自分の感情を抑えてでもその人の期待に応えようとする『自己抑制型行動特性（通称イイコ行動特性）』を持つ青年、と定義する。そして、Erikson（1950 仁科訳 1977/1980）の精神分析的個体発達分化の図式 Epigenetic Scheme の視点から「よい子」の自我の心理社会的発達段階の特徴を検討することを目的とする。

「よい子」は生育史上、親との関係の中で慈愛願望が充足されず、自分に対する不信感を抱いている。そのため、親からの愛情を得るために自分の欲求を犠牲にして、親の意見に従うことで安心を得た。その結果、自己決定が苦手で、親に決定を委ねることを選択するという依存的な心が形成されていくという（宗像，1998）。以上より、「よい子」は第Ⅰ段階である「信頼感」の形成が困難であり、さらに第Ⅱ、第Ⅲ段階である「自律性」「自主性」の獲得に大きな問題を残していることが推察される。また、「自分らしさ」の喪失を抱える「よい子」は、第Ⅴ段階である「アイデンティティ」の獲得に問題を抱えていることも推察される。

しかし「よい子」は一方で、自己を抑圧してまでも他者の期待に応えようとする目覚しい努力、外的なものにとどまるが周囲に適応しようとする高い能力を保持しており、「勤勉性」の高い達成度が推測できる。

以上より仮説として、以下の2点を挙げる。「よい子」傾向が高くなるほど、①「信頼性」「自律性」「自主性」「アイデンティティ」の達成度は低くなる。②「勤勉性」の達成がよい。

方 法

1. **調査対象者および調査時期**：A 大学生 260 名を対象に実施。分析対象は 214 名（男性 109 名，女性 105 名，平均年齢 20.70 歳，SD=1.12）。有効回答率 93.86%。調査は 2007 年 11 月に実施した。
2. **調査手続き**：A 大学の講義時間の一部を利用し、質問紙調査を集団実施した。質問紙は以下の内容から構成されている：①「**よい子**」傾向の測定：宗像（1993）の自己抑制型行動特性尺度（10 項目，3 件法），②**心理社会的発達段階**の測定：中西・佐方（1983）のエリクソン心理社会的段階目録検査日本語版（以下，EPSI，56 項目，5 件法）。この尺度は，Ⅰ「信頼性」，Ⅱ「自律性」，Ⅲ「自主性」，Ⅳ「勤勉性」，Ⅴ「アイデンティティ」，Ⅵ「親密性」，Ⅶ「生殖性」，Ⅷ「統合性」の 8 つの下位尺度からなる。また中西・佐方（1983）の指摘に基づき，尺度得点はアイデンティティの達成度の指標として扱うこととした。③**フェイス項目**

結 果

1. 「よい子」傾向の分析

自己抑制型行動特性尺度 10 項目について、因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。その際、因子の共通性、因子負荷量を検討した結果、因指数は 2 が妥当と考えられたため、因子数を 2 に指定した。因子負荷量.35 以上を採用することとしたところ、項目 3「人の顔色や言動が気になるほうである」が両因子に負荷する結果となったため、本項目を削除した。項目を削除後、再度因子数を 2 に指定し、因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。その結果、以下の 2 因子が抽出された（Table 1）。抽出された因子は宗像（1993）とは異なる因子であった。第 1 因子において、たとえ辛いことがあっても自分の感情や主張を抑制し、自分らしさを失っても他者に配慮する特徴が示されたため、「自己の抑制・喪失」因子と命名した。第 2 因子において、他者に気に入らなりたい、自分をわかって欲しいという思いから、他者の意向に沿おうとする特徴が示されたため、「他者の意向に沿おうとする」因子と命名した。

また、因子の固有値は、第 1 因子は 2.91、第 2 因子は 1.52 であった。Cronbach の α 係数は第 1 因子 $\alpha=0.76$ 、第 2 因子 $\alpha=0.54$ であった。尺度全体の α 係数は $\alpha=0.71$ であった。第 2 因子の α 係数が、尺度全体の α 係数よりも低い。この要因として、項目が少ないこと、そして第 2 因子の「他者の意向に沿おうとする」傾向は、「よい子」に限定されるものではないことが挙げられる。第 2 因子に含まれる 3 項目を削除すると、項目数が少なくなるため、そのまま分析を続行した。

Table 1 自己抑制型行動特性尺度の因子分析結果

	第1因子	第2因子	共通性
第1因子「自己の抑制・喪失」 $\alpha=0.76$			
1. 自分の感情を抑えてしまうほうである	0.75	0.01	0.57
2. 思っていることを安易に口に出せない	0.75	-0.01	0.57
7. 自分の考え方を通そうとするほうではない	0.72	-0.04	0.52
4. つらいことがあっても我慢するほうである	0.51	0.17	0.29
8. 自分らしさがないような気がする	0.43	0.06	0.19
9. 人を批判するのは悪いと感じるほうである	0.38	0.11	0.15
第2因子「他者の意向に沿おうとする」 $\alpha=0.54$			
5. 人から気に入られたいと思う	0.18	0.69	0.51
6. 人の期待に沿うよう努力するほうである	0.11	0.55	0.31
10. 自分にとって重要な人には自分のことをわかってほしいと思う	-0.06	0.37	0.14
固有値	2.91	1.52	
寄与率(%)	26.20	9.94	
累積寄与率(%)	26.20	36.14	

項目 3「人の顔色や言動が気になるほうである」を除外した後の平均値は 9.50 ($SD=3.22$) (男性 : 平均値 9.36 [$SD=3.20$], 女性 9.64 [$SD=3.24$]) であった。さらに、「よい子」傾向の性差を検討するた

めに、性別について t 検定を行った (Table 2)。その結果自己抑制型行動特性尺度の性別による差は認められなかった。

Table 2 項目3を除外した後の自己抑制型行動特性尺度の平均値とSD

尺度全体		男性		女性	
平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
9.50	3.22	9.36	3.20	9.64	3.24

2. 心理社会的発達段階の特徴の分析

EPSI 下位尺度のまとまりを検討するために、下位尺度ごとに成分を 1 に指定した主成分分析を行った。その結果、共通性の著しく低い項目 8「私は、自分が死ぬことを考えると不安である」、40「私は、自分の死というものを受け入れることができる」、42「私はこの世の中でうまくやっっているなどとは決して思わない」、51「私は、してはいけないことに対して、自分でコントロールできる」を分析から除外した。以降の分析には、8 下位尺度、52 項目を用いた。Cronbach の α 係数は「信頼性」 $\alpha=0.67$ 、「自律性」 $\alpha=0.75$ 、「自主性」 $\alpha=0.68$ 、「勤勉性」 $\alpha=0.72$ 、「アイデンティティ」 $\alpha=0.74$ 、「親密性」 $\alpha=0.69$ 、「生殖性」 $\alpha=0.68$ 、「統合性」 $\alpha=0.66$ 、尺度得点 $\alpha=0.93$ であり、十分な値が得られた。

以下に、EPSI の下位尺度得点および尺度得点の平均値と標準偏差を示した。また EPSI の下位尺度および尺度得点の性差を検討するために、EPSI の下位尺度得点および尺度得点の性別についての t 検定を行った (Table 3)。「信頼性」、「統合性」、では女性が、「自主性」、「生殖性」では男性が有意な高得点を得ていた。この結果は中西・佐方 (1983) の結果と一致した。

Table 3 EPSI 下位尺度得点および尺度得点の平均値、SD、 α 係数および性別による t 検定

	全体		男性		女性		α 係数	t 値
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
信頼性	21.85	3.94	21.20	4.04	22.52	3.73	0.67	2.49 *
自律性	17.83	3.99	18.22	3.90	17.42	4.06	0.75	1.47
自主性	16.75	3.65	17.23	3.57	16.25	3.68	0.68	1.98 *
勤勉性	22.25	3.85	22.09	3.76	22.41	3.95	0.72	0.60
アイデンティティ	23.68	4.67	24.06	4.73	23.30	4.61	0.74	1.19
親密性	24.13	4.13	23.96	4.04	24.30	4.23	0.69	0.59
生殖性	21.13	4.22	22.01	3.95	20.22	4.32	0.68	3.17 *
統合性	16.87	3.38	16.25	3.53	17.52	3.11	0.66	2.80 *
尺度得点	164.49	24.97	165.02	24.76	163.93	25.30	0.93	0.32

* $p<.05$

3. 「よい子」傾向と心理社会的発達段階の関連

「よい子」傾向と心理社会的発達段階の関連を見るために、自己抑制型行動特性尺度得点および下位尺度得点と、EPSI下位尺度得点および尺度得点との相関分析を行った (Table 4)。

自己抑制型行動特性尺度得点と、「信頼性」、「自律性」、「自主性」、「勤勉性」、「アイデンティティ」、「親密性」「統合性」および尺度得点との間に、有意な負の相関が認められた。「生殖性」との間には有意な相関は認められなかった。また、自己抑制型行動特性尺度の第1因子得点と「信頼性」、「自律性」、「自主性」、「勤勉性」、「アイデンティティ」、「親密性」、「統合性」、および尺度得点との間に負の相関が認められた。さらに第2因子得点と「自律性」との間に有意な負の相関が、「親密性」との間に有意な正の相関が認められた。

以上の結果から、仮説①「よい子」傾向が高くなるほど、「信頼性」、「自律性」、「自主性」、「アイデンティティ」の達成度は低くなる、は支持されたが、仮説②「よい子」傾向が高くなるほど「勤勉性」の達成度は高い、は支持されなかった。また、「よい子」の「他者の意向に沿おうとする」傾向が高まるほど、「親密性」得点が高くなることが示された。

Table 4 EPSI下位尺度得点および尺度得点と自己抑制型行動特性尺度の下位尺度得点との相関係数

	自己抑制型行動特性尺度		
	尺度得点	第1因子	第2因子
信頼性	-0.21 **	-0.24 **	0.00
自律性	-0.38 **	-0.32 **	-0.17 *
自主性	-0.35 **	-0.35 **	-0.05
勤勉性	-0.16 *	-0.19 **	0.06
アイデンティティ	-0.26 **	-0.27 **	0.00
親密性	-0.20 **	-0.34 **	0.22 **
生殖性	-0.11	-0.12	0.03
統合性	-0.30 **	-0.32 **	-0.04
尺度得点	-0.31 **	-0.34 **	0.02

** $p < .01$ * $p < .05$

考 察

本研究は、Erikson (1950 仁科訳 1977) の視点から「よい子」の自我の心理-社会的発達段階を検討した。さらに、仮説として、「よい子」傾向が高くなるほど、①「信頼性」「自律性」「自主性」「アイデンティティ」の達成度は低くなる。②「勤勉性」の達成がよい、を挙げた。

本研究では「よい子」を、「周りの人との関係の中で、自分の肩を持ってくれる人に気に入られようとして、自分の感情を抑えてでもその人の期待に応えようとする『自己抑制型行動特性 (通称イコ行動特性)』を持つ青年」と定義した。自己抑制型行動特性尺度の分析の結果、本研究における

「よい子」は、宗像（1993）とは異なる構造、すなわち「自己の抑制・喪失」を抱え、「他者の意向に沿おうとする」という特徴を有していた。さらに、第2因子として抽出された「他者の意向に沿おうとする」特徴は、信頼性係数が低く、本研究における「よい子」の特徴としては妥当でない可能性がある。しかし、第2因子に含まれる項目を削除すると、項目数が少なくなってしまうこと、さらに本研究および宗像（1997）の定義との不一致が生じるため、項目を削除せず、分析を行った。

「よい子」傾向と心理社会的発達段階の関連を検討した結果、「よい子」傾向が高くなるほど、「信頼性」、「自律性」、「自主性」、「勤勉性」、「アイデンティティ」、「親密性」「統合性」の達成度が低くなることが示された。この結果から、仮説①は支持されたが、仮説②は支持されなかった。

仮説②の不支持に関して、以下の2点が要因として挙げられる。第1に、個体発達分化の図式は各発達段階についての固定的な段階理論ではなく、それ以前の発達課題の達成度の影響を受けると考えられる。「よい子」の「信頼性」「自律性」「自主性」の達成度は低く、そのため「よい子」傾向と「勤勉性」に有意な負の相関が示されたと考えられる。第2に、青年期になり自分の高い要求水準に勤勉さの感覚である技術性がついていかなかったり、社会の中に自分の生き生きとした活動の場が見つけられなかったり、特にやらなければならない課題が、自分の望みから出たものではなく、外から与えられたものである時、勤勉さの感覚は著しく減衰し、内的葛藤が強まっていくという（山本，1984）。本研究における「よい子」は、「他者の意向に沿おうとする」特徴を持ち、その特徴から外的要請に過敏になり、やらなければならない課題を外から与えられたものと認知してしまう。その結果「勤勉性」の達成度が減衰したと考えられる。

さらに、本研究で得られた「よい子」の特徴と、発達段階との関連を検討したところ、「よい子」の「自己の抑制・喪失」という傾向が高まるほど、「生殖性」以外の心理社会的発達が阻害されること、「他者の意向に沿おうとする」傾向が高まるほど、「自律性」が阻害される反面、「親密性」が促進されるということが示された。

しかし、「よい子」の「他者の意向に沿おうとする」傾向が高まるほど、「親密性」が促進されるという結果は再考の余地を残している。「親密性」の段階では、健康な「相互性」すなわち、自分が自分らしくあればあるだけ、相手もまたその人らしくなり得ることができる関係が成立していることが重要である。互いに侵しあうことなくその関係を生産的に維持できるかどうかは、各々の「個」の確立がなされているかどうかによるところが大きいといえる（山本，1984）。しかし、その傾向が高まるほど「アイデンティティ」の達成が損なわれる「よい子」は、「個」の確立が揺らいでいることが推察され、真の「親密性」が達成されているとは考えにくい。この「親密性」と「他者の意向に沿おうとする」傾向との関連は、アイデンティティの未熟さや脆弱さが潜んでいるときに、不安や孤独から逃れようと誰かれとなく過度に親密性を求め続ける「偽りの親密性」（山本，1984）の表れであり、自律を欠いた依存的な関係性の表れであると推察された。

最後に、本研究の限界と課題を述べる。本研究では、宗像（1997）に依拠し、宗像（1993）の尺度を用いて「よい子」を捉えたが、宗像（1993）とは異なる自己抑制型行動特性尺度の因子構造が抽出された。さらに、第2因子の信頼性係数が低く、本研究の対象者を測るのに自己抑制型行動特性尺度を用いたのは妥当ではない可能性が示唆された。今後は、より広く「よい子」の特徴をとら

えるために、項目収集を行い、さらに高い信頼性・妥当性を有する尺度へと改良することが求められる。また、「よい子」の心理社会的発達が阻害されることが示唆されたが、その要因や各段階における自我のあり様、特に「よい子」の「親密性」のあり様については検討されなかった。これらは重要な今後の課題であると考えられる。

引用文献

- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society* New York W.W.Norton
(エリクソン, E. H. 仁科弥生(訳) (1977/1980). 児童期と社会 I・II みすず書房)
- 河合温 (1996). 大人によい印象を与えようとする子—「よい子」に見られる問題 児童心理, **50**(1), 110-114.
- 北村晴朗 (1965). 適応の心理 誠心書房
- 桑山久仁子 (2003). 外界への過剰適応に関する一考察—欲求不満場面における感情表現の仕方を手がかりにして— 京都大学大学院教育学研究科紀要, **49**, 481-493.
- 宗像恒次 (1993). 燃えつきおよびその関連尺度 桃生寛和・早野順一郎・保坂隆・木村一博(編) タイプA行動パターン 星和書店 Pp.218-235.
- 宗像恒次 (1997). 本当の自分を見つける本 “イイコ症候群からの脱却” PHP 研究所
- 宗像恒次 (1998). 「いい子症候群」からの脱却 心の健康, **46**(505), 精神衛生普及会, 4-9.
- 中西信男・佐方哲彦 (1983). EPSI エリクソン心理社会的発達段階目録検査 上里一郎(監修) 心理アセスメントハンドブック 西村書店 Pp.419-431.
- 山本力 (1984). アイデンティティ理論との対話—Erikson における同一性概念の展望— 鏝 幹八郎・山本力・宮下一博(編) アイデンティティ研究の展望 I ナカニシヤ出版 Pp.9-38.